

## 家庭生活についての全国調査 東北データの分析(第2報) —「家族構成」から見た家庭生活・保育学習への示唆—

渡瀬典子<sup>\*1</sup>, 中屋紀子<sup>\*2</sup>, 日景弥生<sup>\*3</sup>, 長澤由喜子<sup>\*1</sup>,  
浜島京子<sup>\*4</sup>, 黒川衣代<sup>\*5</sup>, 高木 直<sup>\*6</sup>, 砂上史子<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup> 岩手大学教育学部, <sup>\*2</sup> 宮城教育大学, <sup>\*3</sup> 弘前大学教育学部,  
<sup>\*4</sup> 福島大学教育学部, <sup>\*5</sup> 秋田大学教育文化学部, <sup>\*6</sup> 山形大学教育学部

Survey on Children's Consciousness and Behavior in Family Life:  
Analysis of the Data in the Tohoku District (2)  
- Suggestions regarding Family Life and Child-care Learning from the Viewpoint of  
Family Structure -

Noriko WATASE *Iwate University, Faculty of Education*  
Noriko NAKAYA *Miyagi University of Education*  
Yayoi HIKAGE *Hirosaki University, Faculty of Education*  
Yukiko NAGASAWA *Iwate University, Faculty of Education*  
Kyoko HAMAJIMA *Fukushima University, Faculty of Education*  
Kinuyo KUROKAWA *Akita University, Faculty of Education and Human Studies*  
Nao TAKAGI *Yamagata University, Faculty of Education*  
Fumiko SUNAGAMI *Hirosaki University, Faculty of Education*

### はじめに

少子・高齢化を背景に、新学習指導要領では小学校・中学校・高等学校全てにおいて家庭・地域社会で異世代の人々と関わり、相互理解を深める学習の重要性が示唆されている。日本家庭科教育学会は「子どもの実態に即した家庭科カリキュラムの構築」<sup>1)</sup>として、平成14(2002)年に「家庭生活についての調査」を実施した。20年前の1982(昭和57)年に同じく家庭科教育学会で実施された「家庭生活の認識に関

する調査」<sup>1)</sup>では、東北地区の児童・生徒が将来自分の家庭を形成することに消極的であること、「家庭の仕事」実践にジェンダー差が存在することが指摘されていた<sup>2)</sup>。

第2報では、東北6県の児童・生徒の家庭生活に対する意識・異世代(乳幼児・高齢者)と関わる状況を家族構成(3世代同居及びきょうだいの有無)から検討する。とくに、東北地区の児童・生徒の家庭生活の現状・意識が20年前に比べてどのように変化したか、全国と比較して東北地区の特徴はどの点にあるかに注目する。以上の検討を通し、今後の家庭科教育での家庭生活及び保育に関する学習の示唆を得ることが本報告の目的である。

(受付 2004 年 4 月 6 日 / 審査終了 2004 年 4 月 28 日)  
〒020-8550 盛岡市上田 3-18-33 岩手大学教育学部

## 研究の方法

### 1. 研究の対象

本報告は、4種類（A、B-1～3）の対象グループに分け、検討をする。Aは1982(昭和57)年実施「家庭生活の認識に関する調査」東北6県(青森・秋田・岩手・宮城・山形・福島)、小2・4・6、中2、高2対象の調査である。Bは2002(平成14)年実施「家庭生活についての調査」小4・6、中2、高2対象で、第1・3・4報でも扱うデータである。ここではBをさらにB-1:全国調査対象者、B-2:東北6県、B-3:東北6県の中で大学所在地・中核都市にある学校通学者に分けて検討をする(表1)。B-3のカテゴリを設けたのは、A調査実施時のサンプリングが中核都市に集中していたからである<sup>3)</sup>。A、B調査ともに日本家庭科教育学会が実施した自記式質問紙法による調査である。

表1 調査対象

本論文中で用いる記号	調査年	対象地域	対象者数
A	1982(昭和57)年	東北*	2,484
B-1		全国	11,142
B-2	2002(平成14)年	東北	4,680
B-3		東北*	1,685

### 2. 調査対象者の家族構成

調査回答者の家族形態を見ると、全国調査（B-1）では核家族(70.3%)、拡大家族(29.7%)、東北地区(B-2)では核家族(50.6%)、拡大家族(49.4%)が対象である(A調査:1982年実施では核家族72.5%、拡大家族27.5%)。図1のB-2(東北・全体)、B-3(東北・都市)の比較から町村部で拡大家族の割合が高いという特徴が現れている(図1)。

次に調査対象者を学年別に「拡大家族」、「弟妹の有無」で分類したところ、図2に示される結果だった。東北地区はすべての学年において「拡大家族・弟妹あり」という大家族の割合が高い。世帯の平均人員は東北で4.89人(都市4.73人)、全国は4.34人だった。次に、東北地区全体(B-2)のきょうだい数を見ると、「3人」という回答が多いものの、都市部（B-3）では6割が「2人きょうだい」を占め、全国データの傾向とほぼ同じだった。

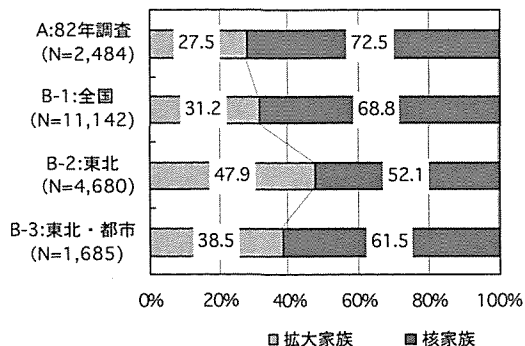


図1 調査対象の家族構成 (世帯類型)

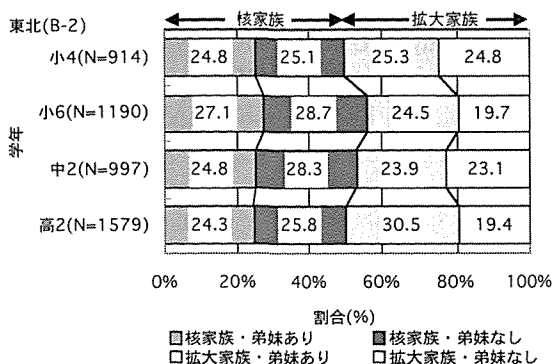
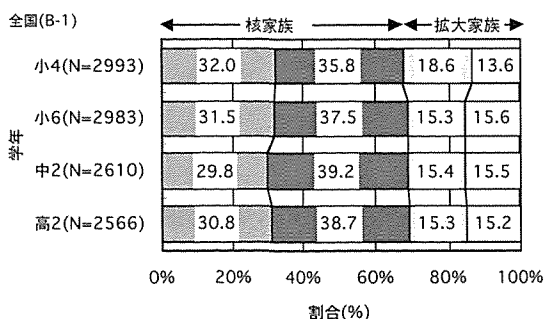


図2 家族構成 (学年別)

### 3. 使用するデータ

表2に示したように、本報告ではA調査はB-3(東北・都市)との比較から児童・生徒の「家庭の機能」観の変化を見る(設問10)。「家庭の仕事の状況(設問4-1・2)」、「子どもの遊び相手(設問8)」は、2002(平成14)年実施の全国・東北調査の比較を中心に検討する。

表2 本研究で使用するデータ

本論文中で用いる記号	家庭の機能	家庭の仕事の状況	子どもの遊び相手
A	○	—	—
B-1	○	○	○
B-2	○	○	○
B-3	○	—	—

結果と考察

1. 「家庭」の大切な働き

はじめに「家庭には次のような働きがあります。あなたが大切だと思うものの番号に○をいくつでもつけてください」という設問10-1の回答結果を見る。B調査(2002年実施)では、全国・東北で大きな回答傾向の違いは見られない。一方、図3を見ると、A(1982年実施)とB-3では「寝たり休んだりする」をはじめとし、「子どもを生み育てる」、「夫婦が一緒に暮らす」、「暮らしに必要なものがある」、「暮らしに必要なお金がある」という家族の再生産機能に関

わる項目に差異が見られる。また、「老人や病人などが守られる」、「近所の人や友達とつきあう」という人とのかかわりといった点で「大切」と捉える傾向が見られる。

次に、AとB-3を「家族構成(核家族・拡大家族)」で見たのが図4である。A調査では拡大家族の中で暮らす児童・生徒の方が多くの項目に対して家庭の機能の大切さを見出す傾向にあったが、B調査(B-1、B-2、B-3)間では、家族構成の違いで回答に大きな差異は現れなかった。例えば、「寝たり休んだりする」「暮らしに必要なものがある」の回答を見ると、B調査では家族構成の違いによる回答割合の差が縮小した。

次に問10-2「家庭の機能でもっと望むこと」の回答を見ると(図5)、「ゆっくり寝たり休んだりする」「お金がたくさんある」の回答率が著しく伸びた。また、B-3とA調査の回答結果を比較するとB-3では「両親が仲良く暮らす」の回答が突出して高いのが特徴的である。一方、B-3の「家の習慣を大切にする」

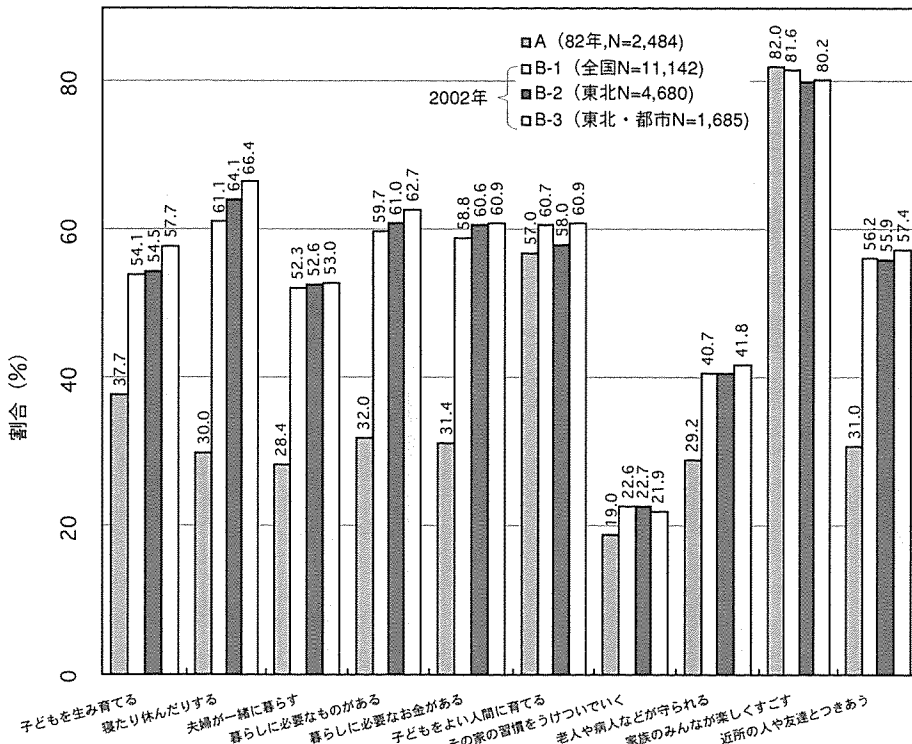


図3 「大切だと思う家庭の機能」観の変化

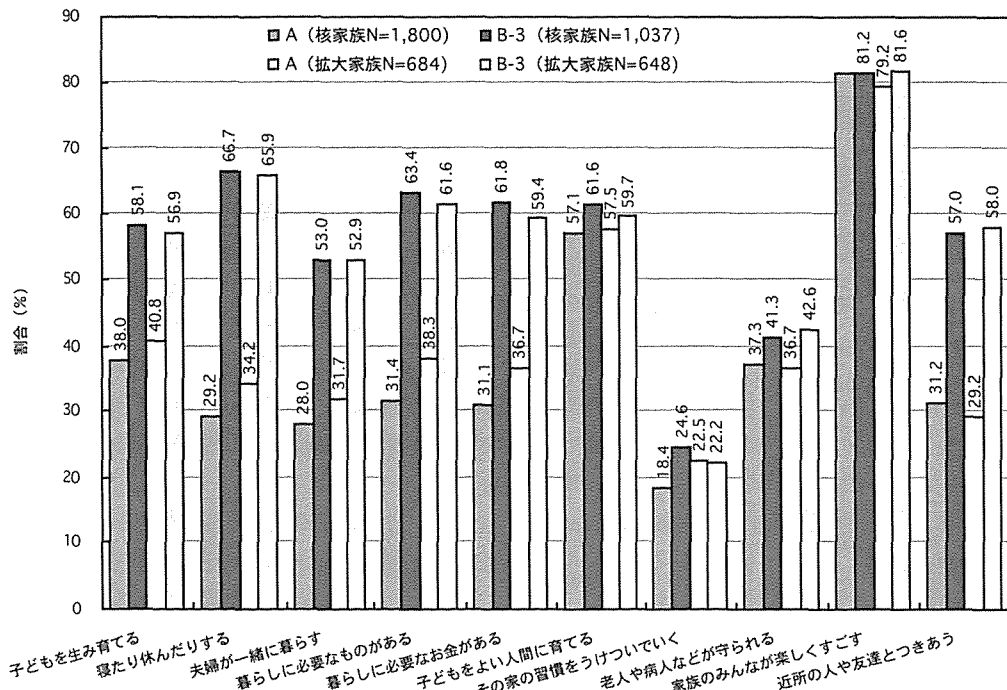


図4 「大切だと思う家庭の機能」観（家族構成別）

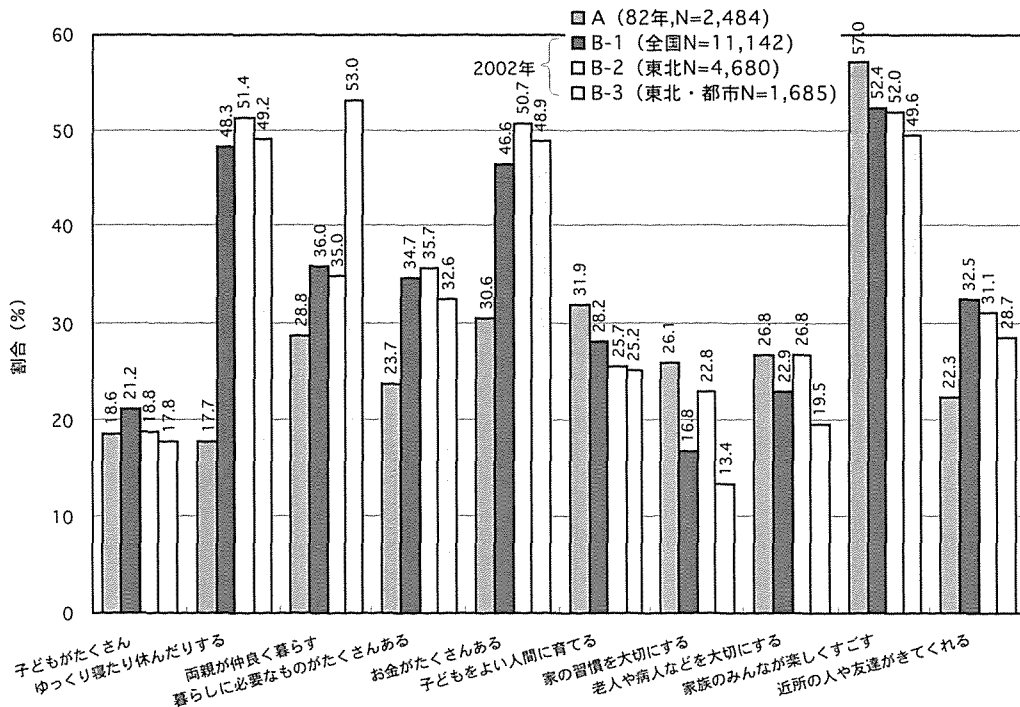


図5 「家庭にもっと望むこと」

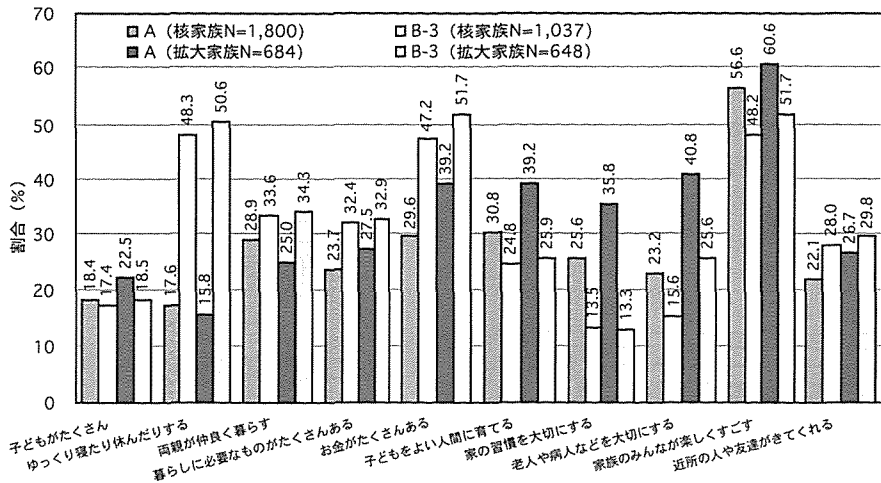


図6 「家庭にもっと望むこと」(家族構成別)

「老人や病人などを大切にす」の回答率はA調査と比べ、低下した。

問10-2をAとB-3を核家族・大家族に分けた「家族構成」で見ると、大家族の中で暮らす子どもが家庭に望むことがやや多い傾向にあった(図6)。1982(昭和57)年実施のA調査と大きく異なるのは「寝たり休んだりすること」、「お金がたくさんあること」をB調査ではより望むようになった点である。一方、「子どもをよい人間に育てる」「家の習慣を大切にす」といった教育機能への期待は希薄化し、A調査では大家族の4割が求めている「老人や病人を大切にす」ことが15%以上も落ち込んだ。これは人口の高齢化・医療技術の進歩で健康を損ねた高齢者が家庭から少なくなったことが推測されるが、反面、養老意識が希薄化したとも解釈できる。以上のことから家庭に求める機能が伝統・習慣の再生産から、子ども自身の身体・精神の再生産(やすらぎ)を求めようになっ変わったことが浮き彫りとなった。

## 2. 他者・異世代との関わり

### (1) 高齢者・からだの不自由な人とのかわり

『「お年寄りや体の不自由な人に声をかけたり手助け」をどれくらいしていますか』という質問4.1(f)への回答から、異世代との日常的な関わりを現状を見る。ここでは「いつもする」「ときどきする」の回

答合計結果を検討した。その結果、東北・全国ともに学年進行につれて高齢者との関わりが減少する傾向にあった(図7)。とくに東北では小学校のときに高齢者や体の不自由な人と日常的に関わる機会が乏しく、家族構成差から見ると大家族は高齢者と関わる機会が多いものの、学年進行とともに核家族・大家族による差が縮小する(図7)。

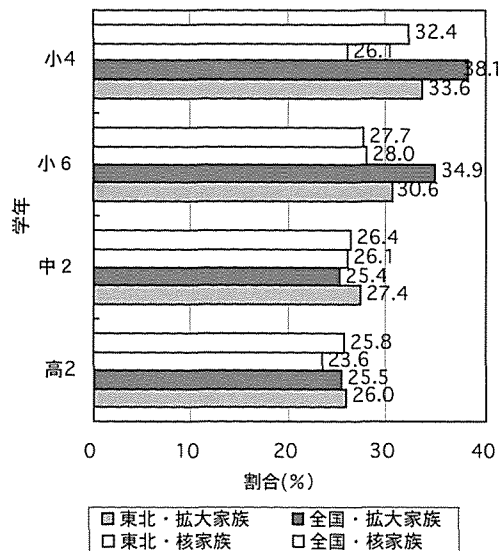


図7 日常生活で「お年寄りや体の不自由な人への援助」をする

次に、児童・生徒が「高齢者・体の不自由な人に声をかけたり手助けする」ことを「もっとすすんでするようにしたい」という、人と関わろうとする意欲を見ると、拡大家族の児童・生徒の方が高齢者ともっと関わるようにしたいと考えていた(図8)。しかし、こちらも学年進行とともに回答率が低下し、東北地区の高2では4割を切っていた。

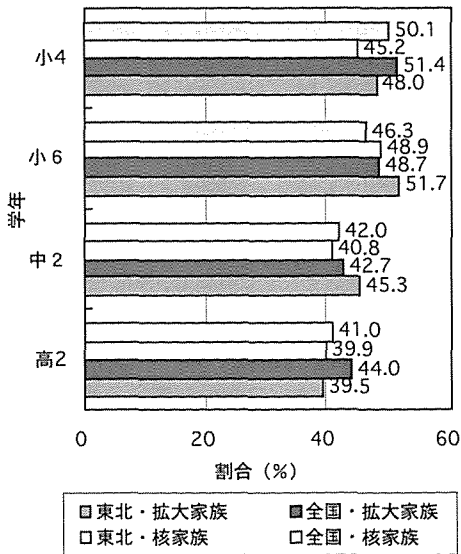


図8 もっと「お年寄りや体の不自由な人への援助」をしたい

(2) 幼児とのかかわり

次に幼児との日常的な関わりを見ると、「高齢者・体の不自由な人との関わり」に関する結果と同様に、東北・全国ともに学年進行とともに幼児との関わりは減少傾向にある。この傾向は、調査対象者の弟妹の有無にかかわらず減少する。さらに、学年進行とともに「弟妹の有無」による幼児と関わる差異は縮小することから、自分の弟妹以外に幼児と関わる機会が乏しいと考えられる(図9)。次に「子どもの遊び相手をもっと進めたい」という回答割合を見ると、自分の弟妹が幼少であろう小4の児童は、幼児ともっと遊ぶようにしたいと考えている割合が高い。しかし、「弟妹あり」群では小6で急激に、さら

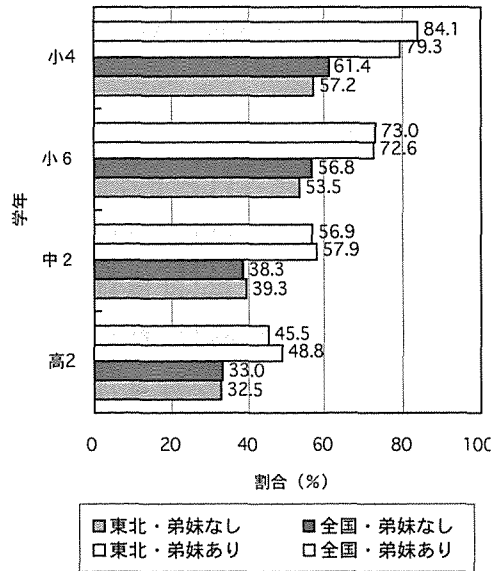


図9 日常生活で「子どもの遊び相手をする」

にその後も学年進行につれて幼児ともっと遊ぶようにしたいとは考えなくなる(図10)。また、幼児の遊び相手を進めようとする態度と弟妹の有無は学年進行とともに関連が弱まる傾向にあった。

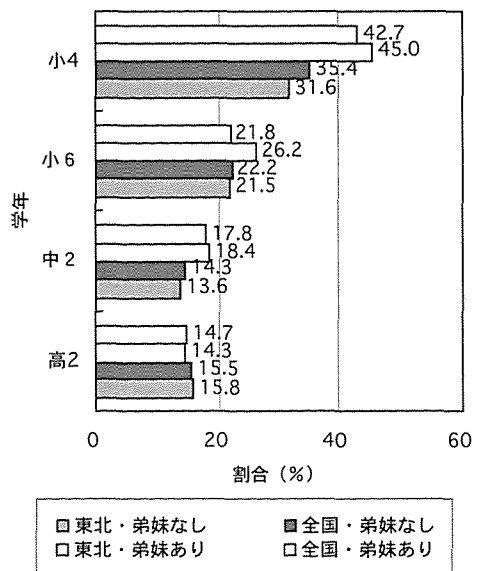


図10 もっとすすんで「子どもの遊び相手」をしたい

表3は、問8-1「日曜日に近所の3-4歳の子どもの遊び相手を1時間くらい頼まれたとしたらどうしますか」に「喜んで遊んであげる」「遊んであげる」と回答した割合である。表中に示すように、東北地区(B-2, B-3)の「核家族・弟妹なし」群でもっとも回答割合が低く、子ども(幼児)とのかかわりに対しやや消極的だと考えられる。一方、「拡大家族・弟妹なし」群では、全国(B-1)と東北で大きな差は見られなかった。

さらに子どもの遊び相手を引き受けたい／引き受けたくない理由を見ると(表4)、「子どもが好きだから」は「弟妹なし」群が低率でとくに東北(B-2)では顕著である。一方、子どもと遊ばない理由を見ると「子どもが好きではない」が「弟妹なし」群で多い。最も特徴的なのは東北での「弟妹なし」群では「遊ばせ方がよくわからない」ことを理由に挙げている点である。

表3 「日曜日に近所の3-4歳の子どもの遊び相手を1時間頼まれたとき」引き受ける

		N (%)			
		核 家 族		拡 大 家 族	
		弟妹あり	弟妹なし	弟妹あり	弟妹なし
全 国 (B-1)	(N=11, 142)	2758 (79.6)	3221 (76.6)	1428 (79.0)	1278 (76.7)
東 北 (B-2)	(N=4, 680)	950 (80.4)	929 (73.8)	993 (80.0)	762 (76.4)
東北・都市(B-3)	(N=1, 685)	407 (80.9)	394 (73.8)	288 (81.1)	221 (75.4)

表4 子どもの遊び相手を引き受けたい／引き受けたくない理由

		(%)			
		全 国 (B-1)		東 北 (B-2)	
		弟妹あり	弟妹なし	弟妹あり	弟妹なし
		(N=5273)	(N=5869)	(N=2501)	(N=2179)
た 引 き 受 け た 理 由	1. 子どもが好きだから	40.5	37.5	40.6	<u>34.3</u>
	2. 頼んだ人が喜ぶから	14.1	14.5	12.7	13.9
	3. 頼まれたから当たり前	15.3	14.7	<u>17.5</u>	16.8
	4. 自分のためになるから	3.1	3.6	3.7	3.7
く 引 き 受 け な い 理 由	5. 子どもは好きでないから	2.9	4.1	3.0	<u>4.3</u>
	6. 自分の好きなことができないから	4.6	4.8	4.4	5.2
	7. 遊ばせ方がよくわからないから	4.2	5.1	5.7	<u>6.9</u>

注) 表中の下線は他群と比較し、特徴的(回答割合が低い(-)高い(=))ことを意味する。

## 要約と今後の課題

本報告で明らかになったのは、以下の点である。

- (1) 1982(昭和57)年実施のA調査と比較し、2002(平成14)年実施のB-3(東北・都市)調査では「家庭生活の機能」が身体・精神的休息を求める傾向に変化した。全国(B-1)・東北(B-2)でもB-3と共通した傾向にある。「家族構成(核家族・拡大家族)」差による回答傾向の違いは20年間で縮小した。
- (2) 「他者・異世代との関わり」では、「高齢者・体の不自由な人」、「幼児」とともにすすんでかわろうとする回答割合が学年進行とともに減少した。全国と東北の調査値を比較すると、祖父母との同居と「高齢者・からだの不自由な人とのかわり」間に明確な関連はなかった。一方、幼児との関わりは「弟妹の有無」と関連し、東北(B-2)の「弟妹なし」群では幼児と積極的に関わる・遊ぶことを避ける傾向が見られた。
- (3) 東北(B-2)の「きょうだいなし」群が「子どもと遊ぶ」ことに消極的な理由は「遊ばせ方がわからない」ことが挙げられていた。

90年代以降の家庭科教育分野における保育体験学習の研究を見ると、子どもと触れ合う経験の重要性、親準備性が育つ高等学校の時期での学習効果が示唆されている<sup>4)</sup>。本調査結果では学年進行に伴い、子ども・高齢者とかわりたいと考える回答率は低下傾向にあった。しかし、子ども・高齢者との親和性を高める取り組みによって、家庭生活・保育学習が深化

すると考えられるため、実践の検証を今後の課題としたい。

## 引用文献

- 1) 日本家庭科教育学会. 現代の子どもたちは家庭生活で何ができるか 児童・生徒の発達と家庭科教育(2). 東京, 家政教育社, 1985, 171p.
- 2) 日本家庭科教育学会東北地区会. 現代のこどもは家庭生活をどう考えているか—東北地区の実態から—. 岩手, 熊谷印刷出版部, 1984, 136p.
- 3) 前掲書1, p.113
- 4) 例えば, 武藤八恵子. 保育学習の情意評価における男女差(第1報)—中学3年共学保育におけるレディネスと学習による変容—. 日本家庭科教育学会誌34(3), 1991, p.29-36, 大路雅子, 松村京子. 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究(第1報)—特徴的対児行動—. 日本家庭科教育学会誌41(4), 1999, p.31-38, 伊藤葉子. 中・高校生の親準備性の発達. 日本家政学会誌 54(10), 2003, p.801-812, 金田利子 “序1章 学校教育における普通教育としての『保育教育』を考える—今, 保育教育で身につけたいことは何か—”. 育てられている時代に育てることを学ぶ. 東京, 新読書社, 2003, p.12-43, 渡貫由季子, 武藤安子. 高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因—自我発達との関連で—. 日本家政学会誌55(2), 2004, p.135-144などがある。